大志万一徳先生を送る

樋　口　秀　雄

外国語を教える場合，その外国語を母国語とする国で外国人に教える場合と，それ以外の国で教える場合とでは，教授法が異なるのは至極当然の事である。文化的環境が異なるからであるが，言葉とその背景となっている文化を共時的に教えることの必要性がわかっていても，実践の場面では大きな障害につき当ることになる。対策として考えられるのは，学習者に出来る丈長期の留学経験の機会を与えてやること，あるいは，当該外国語を母語とする人（または教員）に接する機会を増やしてやることである。現実にそのいずれもが実行不可能に近いからこそ，その体験の欠如を補う方法として発達したのが教授法であろう。

大志万一徳（われわれは，親しみをこめて，一徳（いっとく）先生と呼んでいる）先生は，1953年に同志社大学文学部英文学科を卒業，しばらく高校教諭として教べんをとっておられたが，この間，フルブライト奨学金による教員派遣計画の一員として，サンフランシスコ・ステート・カレッジに留学，1964年，同大学のＭＡを取得された。1965年から1967年まで同志社大学講師を勤められ，1967年同大学の専任講師に就任された。1971年同助教授，1984年同教授に昇任されたが，この間，1976年にはノースウェスタン大学大学院で研讃を積まれ，留学中は，人文学，主に言語理論を専攻されたが，意味論の大家で，後にカリフォルニア選出の上院議員として，英語公用語法案を議会に提案したＳ．Ｉ．ハヤカワ教授の指導を受けられた。大志万先生はこのハヤカワの影響を多分に受けられたように思われるが，先生の初期の論文は言語理論に焦点が当てられていて，その痕跡が随所にみられる。

一般意味論に始まり，コゼブスキの言語理論による一般意味論学派に関する解釈はその典型である。文明の理解の深い洞察を可能にしてくれるのは言葉の構造分析であるとする立場は，まさにハヤカワが『思想と行動における言語』において展開した理論の中核をなすものであり，ハヤカワの場合，この理論を政治的に応用したものが，「二言語主義」の否定であり，「英語第一主義」の主張である。大志万先生の第三の論文，「派閥には積極的な意味があるか」（英文）は，派閥を肯定的にとらえている点，ハヤカワと同じ保守的側面がうかがわれる論文である。

次に「伊藤博文とオリバー・ウェンデル・ホームズ，Jr.の問題解決方法に差はあるか」（英文）は先生の最初の論文「コトバのワナ――一つの意味論的考察」の理論を応用することによってこの疑問に答えたものである。言葉の構造には，われわれの文化，社会，文明の構造を決定する役割を果す面と，文化構造そのものを内面化する手段としての面と，ふたつの側面があり，言葉の構造の研究により，個人の生活や個性への洞察は勿論，大きくは文明理解が可能だとする考え方が最初の論文であった。この理解に従って，伊藤とホームズ，Jr.の問題解決法に違いがあるのは，まさに異文化の差異に起因するものであるとの結論に達したわけである。これは，文化と個人との関係に関する一般意味論アプローチであるが，「複合社会は単一社会より合理的であるか」（英文）では，言語構造と社会および文化というより大きな枠組に焦点が移っている。両者には差がみられないというのが結論であった。

一体，この種の研究方法は果して妥当性をもつかどうか不安が残るのだが，この疑問に答えてくれるのが，「社会人類学は自然科学か」（英文）である。これは，A.R.ラドクリフ－ブラウンの肯定的理論と，E.E.エバンズ－プリチャードの否定的理論についての比較論的考察であるが，結論は，後者を正しいとするものであった。

言語から社会，さらには文化の構造を分析するという方法は，現代のような計量化の時代にあって説得力をもちにくい。先生の几帳面な性格も促進剤

となって，研究が実践的なものに移行していくのは当然の成り行きであった。この種のフィールド・ワークと具体的資料に即しての論究が行われたのは「産業社会をコントロールしているのは契約か」（英文）であるが，これ以後の論文はいずれも先生自身の体験によって検証されたものであるという特徴をもっている。タイとシンガポールのイスラム少数派への考察であるオマール・ファルク批判もそうであるが，最近発表のイバン族の家族に関する論考，「イバン族のビリキーファミリーに関する民俗誌的研究」（英文）は，方法論的にみて，先生の研究の当然の帰結であると言えよう。

1990年から1994年の4年間における学会における口頭発表は4回におよぶが，いずれもイバン族に関するものである。

最初に述べたように，英語を母国語としない国で英語を教えることの難かしさという障害を克服する有効な方法は，先生の研究対象を知っている場は英語圏ではないが，現地での経験とそこから来る自信は，英語教育の面でも大いに役立っていると思われる。大志万先生は今後もイバン族の研究を更に続けると聞いている。更なる発展を祈ってやまない次第である。